

第19回高島賞

審査結果報告

◆受賞者・受賞対象

川瀬 慈 (国立民族学博物館文化資源研究センター助教)

**エチオピアにおける民族誌映像制作ならび
に上映活動**



講 評

川瀬氏の上記の研究活動について、以下の三点において本年度の高島賞受賞にふさわしいと評価する。

一点目は、映像作品自体についてである。川瀬氏は、2001年に京都大学大学院に入学後、エチオピアのアジスアベバやアムハラ州を中心に民族誌をベースとした映像制作に取り組み、精力的に作品を発表してきた。その作品は選考委員が確認できたものだけでも7作にのぼる。エチオピアを題材にした映像作品は、物売り少年・放浪楽師・精霊憑依など、いわばエチオピアの「影」ともいえる領域にあえて焦点をあてている。撮影過程においても、また上映活動中もおそらくエチオピア人観衆から肯定的な反応ばかりではなかったにちがいない。だが川瀬氏は、そのような反応に臆するどころか真正面から受けとめ、多様な解釈・評価に対して開かれた形で映像制作に取り組んでいる。

川瀬氏は、映像制作者として海外においても精力的に研究成果を発表し、イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭では「最も革新的な映画賞」を受賞するなど高い評価を受けている。また、川瀬氏は国内外の民族誌映画祭の審査委員をつとめるなどしており、日本における映像人類学を今後牽引していく存在となるであろう。

二点目は、その積極的な上映活動である。これは川瀬氏の熱意によるものであるが、それが実現したのもその作品が国内外で高く評価された結果であるといえる。その活動によって、同氏は民族誌映画の制作者として国外においても知名度をあげたのである。

三点目として、川瀬氏が、より多くの研究者が映像人類学の成果発表の場をもてるよう尽力してきたことも高く評価したい。さまざまな学会などでフォーラムを開催し、複数の研究者とともに積極的に成果を発表することで、映像人類学の発展に貢献した功績は評価されるべきである。

よって選考委員会は全員一致で川瀬氏の研究活動を、ナイル・エチオピア地域における学術研究に大きな貢献をもたらした業績であると評価し、2013年度高島賞に値すると判断した。

2013年4月15日

第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞選考委員会
児玉由佳(委員長) 菊地滋夫 石原美奈子